

『少女ブック』における読者意識の形成に関する研究

The study of formation of loved readers (fan) consciousness concerning
for “SHOJO BOOK” (published by “SHUEISHA”) for children
(from elementary school students to women’s high school students)

田中卓也
Takuya TANAKA

概要

『少女ブック』は、集英社から1951（昭和26）年8月に発刊された。同誌は創刊号より表紙に少女モデルを採用した。また同誌には早い時期から投書欄「仲良しルーム」が存在していた。「仲良しルーム」は少女読者の人気を誇った欄であった。また投書欄には「ブツ子」という愛称で親しまれるキャラクターが登場し、誌面を賑わせた。少女読者らはこぞって「仲良しルーム」に投書を寄せ、仲間を見つけた。文通する者もいれば、「少ブ」と略語を使用し、愛読者仲間に参入する者等も存在した。その後読者間の交流は、誌面外になることが多かった。読者が互いに「少ブ」という略語を合言葉に、目には見えない読者の共同体を形成した。また読者の関心が今まで以上に、多方面に展開した。仲間を求めること以上にスタア、アイドルに熱狂するような傾向が見られた。同誌編集者は誌面では手の届かないスタア・アイドルと文通を通じて交際し、より近い距離での関係を構築することに一役買った。そのため本来の小説、物語を中心であった誌面構成が、テレビの普及等を理由に大きく様変わりすることになった。時代の流行に追随することが目的となった同誌は、「あなたのすてきなスター雑誌」としての方向性をとることになり、少女雑誌からスタア・アイドル誌への誌面方針の転換を余儀なくされた。

キーワード：集英社、少女雑誌、疑似姉妹、スタア・アイドル、仲良しクラブ

Abstract

“SHOJO BOOK” were published by SHUEISHA in August 1951. “SHOJO BOOK” were adopt in model of a girl, since first issued in 1951 and provided in contribution columes in first time. “NAKAYOSHI ROOM” of the contribution columes were popular in giris readers. “BUKKO” as characters of the magazines bebusting which had a lot of readers and many girls readers were contribution of written for “NAKAYOSHI ROOM” and found magazines friends. Those magazines readers harder, were composed

of loved in magazines fan. It was made of successs acquisition of those learning magazines. Most of fan formed the “readers (fan) communities”. Contributors of readers were called “SHOUBU” for “SHONEN BOOK” each other. Readers were interested in many things grdually. Readers were object of adoration more like wild excitement than now.

The contents of magazines were romances, serialstories in the center, but it was changed world to have an effect on set a television. Those magazines as a result of unavoidable circumstances were changed magazines for giris from for idol, star.

Keywords: SHUEISHA, Magazines for Girls, assupected sisters, star idol “NAKAYOSHI CLUB” for readers column

目次

1. はじめにー本研究の目的と先行研究の検討ー
 2. 少女ブックの誕生
 - 2.1. 『おもしろブック』の成功
 - 2.2. スタア・アイドルを映し出す少女誌
 - 2.3. 売り上げ伸ばす集英社雑誌
 3. 少女読者たちの投書とその特徴
 - 3.1. 「仲良しルーム」に寄せられた投書
 - 3.2. 「ブックファン」と呼び合う少女愛読者
 - 3.3. 誌面上から誌面外へー「グループ通信」・「おたよりちょうだい」欄の新設ー
 4. スタア・アイドルに近づきたい、なりたいーいつしか御手紙までよこす少女読者ー
 - 4.1. スタアにお手紙を書く少女たち
 - 4.2. 熱狂的スタアを求める少女読者の急増とおしゃれ企画の登場
 5. 誌面構成の工夫
 - 5.1. 学習教養教材としての誌面作成
 - 5.2. 表紙の「写真化」とアンケート調査の実施
 - 5.3. 誌面上における「マンガ」、「スタア」、「ファッション」記事の拡大ー誌面構成の模索と苦労ー
 6. おわりにー『少女ブック』の廃刊ーおしゃれで多趣味・多興味な少女たちの登場ー
-
1. はじめにー本研究の目的と先行研究の検討ー

本研究は、第二次世界大戦後に集英社から出版された少女雑誌『少女ブック』に光をあ

て、同誌の誌面内容および構成、さらに誌面に集うことになった少女読者らの性格・特徴を見いだすことが目的である。集英社が同誌の幼年版として刊行された『幼年ブック』（1959年刊行）は、同誌では、「投稿欄」を設けていた「幼ちゃんクラブ」（のちに「幼ちゃんポスト」と改称）において投書家と編集者（幼ちゃん）が投書で交流を図った。また投書家は、「編集者」を幼ちゃんと気軽に呼び、近い距離で交流をともにした。また「投書家」らは誌面上で「幼年クラブ」を「幼ブ」と略して呼び、自らを「あいどくしゃ」もしくは「ファン」と称し、愛読者であることを宣言した¹⁾。すでに同誌では、読者共同体の形成がみられず、編集者と読者とのやりとりとして交流が求められている。また略語の「幼ブ」、「愛読者」を「ファン」と称し、投稿欄のなかで読者が言葉を使用していることを見いだした。

これまでに執筆者は明治期から昭和戦前期にかけて発刊されてきた児童雑誌に着目し、読者の性格や特徴について明らかにしてきた。そこでは、誌上で仲間を見つけ、交際し、次第に誌友同士の絆・結束を結ぶようになり、いわゆる「読者共同体」を形成したことについて検証してきた。また投稿欄を通じて、読者等の共同体「われわれ」というアイデンティティを見いだしたとされる。しかしながら戦後に発刊された児童雑誌においても読者共同体が存在したのかという問題は未だ残されており、その問題を解明することを試みるものである。

「読者」に焦点をあてた研究はこれまでに多くの蓄積が存在している。①今田絵里香『少女の社会史』では『少女の友』・『少女倶楽部』を対象とし、少女雑誌に示された「少女」の行為規範の変遷を明らかにしながら、読者が少女雑誌の提示する「少女」をいかにとらえ、受け入れたのかについて分析・考察を試みた。②本田和子『女学生の系譜』では女子学生の読者共同体の存在を指摘し、「少女幻想共同体」と名付けた。また③川村邦光はその著書『オトメの祈り』において、明治後期の少女雑誌を考察し、投稿欄を通じて、女学生の資格の有無に関わらず、ペンネームを用いて『少女』という虚構集団を形成することを明らかにした。川村は「オトメ共同体」とその読者集団を呼称した。

執筆者はこれまで指摘されてこなかった戦後のわが国における少女をふくむ「児童」に注目し、戦前および戦後の児童雑誌の発行された背景を概観することで、当時の子ども読者の姿が浮かび上がってくると考える。本研究は、戦後のわが国の児童雑誌読者の研究の一端を明らかにするものといえる。

なお、本研究は「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」（「平成24年度文部科学省科学研究費助成事業科研費研究」【基盤研究C】＜課題番号：23531032＞研究代表者 田中卓也）の研究成果の一部である。

2. 少女ブックの誕生

2.1. 『おもしろブック』の成功

『少女ブック』の発刊は、戦後になって6年余の1951（昭和26）年8月であった。同誌創刊号より、表紙に少女モデルを採用した。また基本的には1名のモデルが表紙を飾った。発刊の経緯については、集英社の社史にその事情が記述されている。その一部を以下に見てみたい²⁾。

「おもしろブック」の創刊号は、誌名に“少年少女”とサブタイトルをつけていた。が、編集内容を見ると、いずれも少年向けの企画ばかりで、実質上は少年雑誌だった。当時、少女雑誌の分野では、『少女の友』、『少女サロン』、『少女』、『少女クラブ』などがしのぎをけずっていた。中でも「少女」が特色ある漫画と絵物語、それに新鮮な附録で少女読者をひきつけ、六五万部の部数を誇ってはいたが、いずれも戦前タイプのA5判である。B5判の少女誌も、二、三発刊されたりはしたものの不発に終わっている。『B5判は少女誌に向かない』というジンクスが出版界にはできつつあった。相賀社長と陶山専務の意向では、「おもしろブック」の成功をもとに、少女誌の発刊が計画されていた。もし少女誌を出版するなら、業界のジンクスはあるものの「おもしろブック」と対をなすよう、同じ判型にすべきではないか。こうして一年ほどの準備期間をへて、「少女ブック」が創刊された。昭和二六年八月のことである。編集長には、戦争末期に小学館で「日本少女」の編集に携わった金澤一があたり、以下五名。前年二月、慶應義塾大学を卒業して入社していた若菜正も、この編集部配属された（以下略）

『おもしろブック』の創刊号は、誌名に“少年少女”とサブタイトルが付された。しかし編集内容を見てみると、いずれも少年向けの企画ばかりで、実質上は少年雑誌だったといえる。当時の少女雑誌の分野では、「少女の友」、「少女サロン」、「少女」、「少女クラブ」などがしのぎをけずっていた」とあるように、元来『おもしろブック』の創刊がその経緯のよううかがえる。3年前の学会において、「『少年ブック』に関する読者の研究—前身雑誌『おもしろブック』の誌面構成と読者の様相を中心に—」（日本幼児教育学会第21回大会、於：敬愛大学、2011年9月11日、口頭発表済）の発表を行った。そこでは「『おもしろブック』読者は、小学生対象の雑誌として登場したが、実際は小学生から中学生がおもな読者層であり、時折女子学生の投書も見られたように、少年雑誌でもなく少女雑誌でもないものであった。その読者らは、「文ちゃんクラブ」にさまざまな形で投書が行われた。なかには記者との距離を近づけながら、投書や作品が掲載されることを望む者、自らのヒーロー像を語り、記者に伝える者やヒーローに少しでも近づくために、勉強や運動に

精を出すいわば「文武両道」を歩もうとする読者も存在した。さまざまな読者が存在していながら、共通のメルクマールを保持していた。それは読者自らが「ブックファン」と称し、誌面で交流を求めたことである。また編集者を「文ちゃん」と称し、読者に愛着をもたせた。読者は誌面で交流を求めようとしたが、作家には直接コミュニケーションをとらせる方策を行った。また同誌の愛読者は、誌面上ではなく誌面の外で交流を図るような「◎◎会」を称した会などをそれぞれで結成し、交流に臨んだ。同誌の読者共同体は、誌面をこえたところで形成され分化していった。

また「当時、少女雑誌の分野では、「少女の友」、「少女サロン」、「少女」「少女クラブ」などがしのぎをけずっていた。中でも「少女」が特色ある漫画と絵物語、それに新鮮な附録で少女読者をひきつけ、六五万部の部数を誇ってはいたが、いずれも戦前タイプのA5判である。B5判の少女誌も、二、三発刊されたりはしたものの不発に終わっている。『B5判は少女誌に向かない』というジンクスが出版界にはできつつあった」ことも発刊の経緯に大きく関係していた。さらに「相賀社長と陶山専務の意図では、「おもしろブック」の成功をもとに、少女誌の発刊が計画されていた。もし少女誌を出版するなら、業界のジンクスはあるものの「おもしろブック」と対をなすよう、同じ判型にすべきではないか」という大きな賭けに出た編集部が意欲がうかがえる。編集部においても、「戦争末期に小学館で『日本少女』の編集に携わった金澤一があたり、以下五名の経験者と思われるメンバーに「前年二月、慶應義塾大学を卒業して入社していた若菜正も、この編集部配属された」とあるように、雑誌編集の経験を持つスペシャリストらが結集し、『少女ブック』発刊に意欲を見せることになった。

ところで明治期から昭和戦前期における少女雑誌の読者に関する研究は、先述の今田、本田、川村のほか、渡部周子、佐久間りか等多くの研究者によってその蓄積が認められる。

少女雑誌の投書欄には、丁寧で上品な表現を使用していながら、「なくって」、「いけませんの如何」、「御座んす」、「(投書) なすった」、「お成り遊ばせ」など女性特有の言葉を使用していることがわかる。少女雑誌においては、このような女性特有の言葉を使用した手紙などが後を絶たなかった。まさしく少女読者を中心とした女性の世界を誌面上で創出しているようにうかがえよう。このことについては、さきに挙げた川村の『オトメの祈り』（紀伊国屋書店、1993年）や、稲垣恭子『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』（中公新書、2007年）、佐藤八重子『ミッションスクール—あこがれの園—』（中公新書、2006年）等において詳細にふれられているので、稿を譲りたい。

いずれにせよ同誌の発刊は、戦前からの少女誌とは異なる新たな少女雑誌として刊行することになった。

2.2. スタア・アイドルを映し出す少女誌

同誌は、少女のための雑誌ではあったが、時のアイドル・スタア・女優等に関するグラビアや記事を掲載した。前述の『集英社七十年の歴史』には、当時の『少女ブック』の内容についてつぎのようにふれている³⁾。

動き出した世情を映して『少女ブック』の誌面は多彩かつ豪華である。まずグラビアや口絵には、そのころの芸能・スポーツ界の人気者たちが勢ぞろいする。『珍ガリバー旅行記』には横綱千代の山と美空ひばり、引出しカラー口絵はバレリーナの谷桃子を中心とした舞踊学校生徒の「おどる森の少女たち」、当時人気絶頂であった童謡歌手の川田孝子が『一日見習い』で貝谷バレエ団のバレリーナ、花柳寿輔の日舞、婦人警官、日赤看護婦、マヤ片岡美容院の美容師に挑戦してみるという、バラエティにとんだグラビア……。連載にも、目配りが行き届いている。『おもしろブック』で実績が証明されている山川惣治が「小さなルミ子」、四色漫画が塩田英二郎の『小象のマッコイちゃん』、これに後に少女漫画の名作と呼ばれるようになる上田としこの『ボクちゃん』と、大家と新進とが競作している様は壮観である。少女コミック誌の始祖とよんでも、あながち誇張ではない。さらにサトウ・ハチロー、西條八十、徳川夢声など放送文化の担い手が名をつらね、かたわら「お手手じまん教室」というような実用情報があるかと思えば、『世界のうごき』なるニュースのページもある。一五〇ページ強の器にさまざまな情報をもりこんだ、少女向け総合雑誌ともいえた

「多彩かつ豪華である」同誌は、「まずグラビアや口絵には、そのころの芸能・スポーツ界の人気者たちが勢ぞろいする」誌面となっていった。当時の人気スタア、一流の俳優、女優陣などが誌面に躍り出ていた。『珍ガリバー旅行記』には横綱千代の山と美空ひばり、引出しカラー口絵はバレリーナの谷桃子を中心とした舞踊学校生徒の『おどる森の少女たち』、当時人気絶頂であった童謡歌手の川田孝子が『一日見習い』で貝谷バレエ団のバレリーナ、花柳寿輔の日舞、婦人警官、日赤看護婦、マヤ片岡美容院の美容師に挑戦してみるという、バラエティにとんだグラビア……。などを大々的に連載した。同誌は「目配りが行き届いて」いた「少女向け総合雑誌」であった。

戦前期にも多くの少女雑誌は刊行されていたが、上記のような内容がメインになることはなく、小説、物語や豪華な付録、投稿欄等でにぎわったものとは異なる性質を持っていた。また次のような記載も見られる⁴⁾。

いまから見ると、『少女ブック』は美空ひばりそのものだったと思えなくもない。彼女は近代日本最大のディーヴァ（歌姫）である。流行歌から民謡、ジャズ、カンツオーネ、

シャンソン、世界中のリズムを天性の声と感性にとかしこみ、人なみ（ママ）はずれたレパートリーを歌いこなした。歌謡曲の枠をこえて、美空ひばり自身が唯一無二のジャンルであった。すべてを吸収し、独自のアレンジをほどこして別の存在に仕立てあげてしまう多様体。美空ひばり自身は、いわば祝祭だったのだ。そして雑誌とは本来的に雑多な、ものの祝祭性を命とする。異質なものの共存、雑多なものの異種混合。少女たちの興味のあるところ、すべてのジャンルを網羅してやろう。その『少女ブック』の多彩ぶりには、美空ひばりがよく似合うのだ。「少女ブック」の創刊号は、部数八万部だった。いまからすれば、少ないと思える数かもしれない。が、復興期に入っていた時期とはいえ、いまだ大衆文化の社会ではなかったし、またこの八万部という数は、集英社の当時の身丈にかなった部数であった

『少女ブック』の創刊号は、部数八万部だった。いまからすれば、少ないと思える数かもしれない。が、復興期に入っていた時期とはいえ、いまだ大衆文化の社会ではなかったし、またこの八万部という数は、集英社の当時の身丈にかなった部数であった」とあるように、まずまずのスタートを切ったように思われる。

2.3. 売り上げ伸ばす集英社雑誌

では、同誌はどのくらいの売り上げを残したのであろうか。社史には、つぎのように記されている⁵⁾。

「少女ブック」の創刊号は、部数八万部だった。いまからすれば、少ないと思える数かもしれない。が、復興期に入っていた時期とはいえ、いまだ大衆文化の社会ではなかったし、またこの八万部という数は、集英社の当時の身丈にかなった部数であった。それが「おもしろブック」と同様に目覚ましい躍進ぶりを示した。創刊から七ヶ月目の翌二八年四月号で早くも倍増の一六万部に達し、以後も飛躍的に部数を伸ばして、先行した強力なライバル誌「少女」を抜き去ったのである。のみならず「少女ブック」は後の週刊「マーガレット」へと姿を変えつつ、集英社の女性雑誌への道を開いていった。社員も大学卒の人材を逐次増強し、二六年末、社員数三九名になった。昭和二七年四月号で「おもしろブック」三二万部、「少女ブック」一六万部、二六年一月号から創刊の「よい子一年生」～「よい子三年生」が各七万部、それぞれの売上率でもきわめて良好であった。こうした戦後の集英社の再発足は、相次ぎ児童誌の好調な創刊でスタートした

創刊号は「八万部」でスタートした同誌は「創刊から七ヶ月目の翌二八年四月号で早くも倍増の一六万部に達し、以後も飛躍的に部数を伸ばして、先行した強力なライバル誌

「少女」を抜き去った」ほどの売り上げを誇った。また『少女ブック』は後の週刊『マーガレット』へと姿を変えつつ、集英社の女性雑誌への道を開いていった。社員も大学卒の人材を逐次増強し、二六年末、社員数三九名になった。昭和二七年四月号で『おもしろブック』三二万部、『少女ブック』一六万部、二六年一月号から創刊の『よい子一年生』～『よい子三年生』が各七万部、それぞれの売上率でもきわめて良好であった」と述べられている。創刊以降、爆発的な売り上げを誇ったことが印象として残ることになった。少女総合雑誌として順調なスタートをきったのである。

3. 少女読者たちの投書とその特徴

3.1. 「仲良しルーム」に寄せられた投書

同誌には投書欄の「仲良しルーム」が存在した。「仲良しルーム」は「仲良し横町」、「お習字てらん会」、「おわらいかご」、「おたよりちょうだい」、「グループ通信」、「配役あそび」の6項目から構成されていた。少女読者の人気を誇った欄であった。「仲良し横町」の投書はおよそ10通ほど掲載された。「仲良し横町」は少し時代が下り、1955（昭和30）年11月号ごろより「仲良し横町1丁目」、「仲良し横町2丁目」と拡大路線をとることになった。また投書掲載数も3倍以上に増加した。1956（昭和31）年になると、投書欄上に突如、アイドル的少女「ブッコ」という愛称で親しまれるキャラクターが誌上に登場した。では、どのような投書が寄せられたのであろうか。少しくのぞいてみたい⁶⁾。

集英社のみなさん、こんにちは。あたし松島トモ子ちゃん大すきよ。これからも、たくさんお写真のせてください。(神奈川 小池安子)

ハロー！ブッコちゃん。写真小説「白い霧の街」のすばらしさ！安田祥子ちゃんのおかおを見るたびにドキドキしちゃうわ。梅田晴夫先生にもよろしくね。(大阪 泉田良子)

ブッコちゃんお元気。「雲よいずこへ」は、あたし大すきよ。わにぶちはるこちゃんの写真もたくさんおのせてね。(神奈川 上山恵子)

「松島トモ子」、「安田祥子」、「わにぶちはるこ」（鰐淵晴子）ファンの投書である。三人の少女読者は、すでにスタア、アイドルに憧れを抱き、写真を見るたびにうっとりしていたのであろう。少女らは、誌面に映し出された憧れのスタアへの思いを日に日に増すようになっていった。そして次号に期待を寄せるのである。

3.2. 「ブックファン」と呼び合う少女愛読者

また、読者らは誌面上で「少女ブック」を「ブック」と略して呼ぶこともあり、「愛読者」を「ブックファン」と呼びかけるシーンもよく見られた。一例を以下に見てみたい⁷⁾。

ブックファンのみなさんこんにちは。七月号の「おたよりちょうだい」の所にのった内山です。みなさんから六百通以上もきて、ウレシクテ！**少ブ**を通じてお礼を申し上げます。お返事に行かない人はおゆるしてください（静岡 内山敏子）

ブッ子ちゃん少女ブックありがとう。**愛読者のみなさんこんにちは。こんどあたしもなかまにいらしてくださいな。なかよく少女ブックを読んでかんそうなどをいいあいましょう。**(熊本・川北久代)

愛読者の中で「少ブ」、「ブックファン」と呼びかけたりしながら、目では確認できない想像上の「少ブ共同体」が形成されていた。「ブックファンのみなさん、こんにちは」であるとか「こんどあたしもなかまにいらしてくださいな」の言葉からもうかがえるのである。

3.3. 誌面上から誌面外へー「グループ通信」・「おたよりちょうだい」欄の新設ー

少女読者らは、「仲良しルーム」に投書を寄せ、仲間を見つけ出し、文通する者もいれば、「少ブ」と略語を使用し、愛読者仲間に参入しようとする者などが存在した。しかしながら読者間の交流は、誌面の外にでて交流する場合も多々あった。それは以下に示した「グループ通信」と「おたよりちょうだい」欄の新設であり、そのことが大きな理由になっていたようである。以下にその内容について垣間見たい⁹⁾。

<グループ通信>

- 「ファンのつどい」伴久美子、松島トモ子、佐藤茂美さんファンの方。入会費二十円。大阪府泉北郡高石町羽衣八一三 石川照代
- 「少女ブック友の会」目的 お便り交換、創作発表、武田賢先指導のペン習字、会費二十円、福井市松本町三六、吉田美奈子
- ひばりちゃんのファンで入会ご希望の方は入会費とひばりちゃんのプロマイドをあげます。新潟県西蒲原郡曾根町ハタヤ、水野花枝

<おたよりちょうだい>

- ★ お習字のすきな方お友達になってね。愛知県犬山市内田九二 若山建子

- ★ 読書の好きな方でいつまでも文通して下さる方 岩手県花巻市宮の町 志田紘子
- ★ 雲よいずこへのファンで絵の好きな方 埼玉県北足郡鳩ヶ谷町大字三ツ和三〇五〇
忍田昌子

◇投書のおやくそくを守りましょう

- ★ 仲よしルームに投書なされたい方で、投書の方法がよくわからないというご質問が
だいぶありますので、ここに記します。
- ① 投書は、お便り、笑話、似顔絵、グループ通信、お便りちょうだい、習字、たずね
人、作文、その他いろいろありますが。一枚のはがき（または封書）には一種類の投
書をしてください。たとえば、笑話と似顔絵をいっしょに書いてはいけません。
- ② あて先は「東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三 集英社 少女ブック仲よしルーム
係」です。その横に必ず赤インクで、似顔絵とか習字とかの投書の種類別を記してお
いてください。
- ③ 似顔絵漫画は必ず黒インクまたはスミでかかねばいけません

<おたよりちょうだい>

- ★ 岸恵子さんのファンの方で**長く文通して下さる方**、大分県別府市朝見区十四班
植木美恵子
- ★ 白鳥みずえ、野添ひとみ、畠野世紀子さんのファンの方 大阪市生野区猪飼野東九
の十九 中島千鶴子
- ★ 中学2年生の方で、**いつまでも文通して下さる方** 鹿児島県鴨池町三九ノ二一
外山敦子
- ★ 東京の方で**いつまでも文通して下さる方** 岐阜市安良田町四丁目 伊藤とき子

<グループ通信>

- ★ 安田祥子さん後援会 会費二十円 入会費十円 三重県河芸郡大里村大字久保田
一四三八、北村方
- ★ 白バラ会 ラジオでおなじみの高橋美智子先生を囲む会、入会希望者は十円切手同
封の上お申し込みください。東京都大田区今泉町八九 金杉八重子
- ★ 雪村いずみファンの方、どしどしお申し込みください。会費二十円。三重県津市中
新町二〇二ノ一、高橋征子

誌面を通じて他の愛読者に「ファンのつどい」、「少女ブック友の会」などのグループ加
入を求め、同じ関心を持った者同士でのさらなる深い交流が図られるようになっていた。

また戦前の少女雑誌では主流であった誌面上での交際（文通）よりも、直接文通相手をさがし、交流を行う読者らが存在していたことがわかる。文通を求める者は住所と名前が明記されていて、誰もが自由に手紙が送付できるようになっていた。投書欄での愛読者の交流は誌面内から外へ移動し始めていたのである。

4. スタア・アイドルに近づきたい、なりたいーいつしか御手紙までよこす少女読者ー

4.1. スタアにお手紙を書く少女たち

少女読者のなかには、仲間との交流を求めるのではなく、誌面に幾度も登場するスタア・アイドルにあこがれ、恋焦がれ熱狂的になる者も少なくなかった。以下には、一読者と当時の女優とのお便りのやりとりが描かれている。少しくのぞいてみよう¹⁰⁾。

若尾文子おねえさま

(スターのおへやに登場)

わたくしは、なんといっても若尾文子おねえさまが大好きです。わたしのおねえさまになってくれないかなあと・・・いつもおもっ

ています。どの映画にでるときもほほえましく、美しいお姿で、おねえさんがでてくると、ほんとにうれしくなってしまう。これからも、ますますがんばって、りっぱになってくださることをとおい空から祈っています。(埼玉・井戸入和子)



若き日の若尾文子（写真）

若尾おねえさまのメモ

本 名：若尾文子

生まれ：昭和八年十一月四日 東京でうまれました。宮崎県立第二高女の出身です。長谷川一夫さんのおでしになられ、大映の「死の街をのがれて」にはじめて出演しました。おすまいは、東京都世田谷区若林一七三番地です。

アイドルに熱狂し、そのアイドルを真似るファッションなどにもおおきな影響を与えていることがうかがえる。少女読者らは、熱狂的に彼女らに近づき、一生懸命近づくことで「マネ」をして自らを「美人」に磨き上げようとした。その象徴が誌面に登場する女優・スタアたちであった。

4.2. 熱狂的スタアを求める少女読者の急増とおしゃれ企画の登場

以下の記事は、当時の女優であった岡田茉莉子、司葉子あてに出された手紙の一節である¹¹⁾。

「うれしいお便り」

★岡田茉莉子（おかだまりこ）さま

★司 葉子（つかさようこ）さま



若き日の岡田茉莉子（写真）

茉莉子おねえさま ごきげんいかがですか。近ごろあんまりいそがしくてたいへんなんで新聞で読んだものですから、心配でなりません。映画ではいつも、楽しそうで、にこにこしてらっしゃるおねえさま、本当はどんなおくらしてらっしゃるのかしら—映画館をでると、きまってそんなこと考えながら、家へ帰ります。おねえさまにお手紙をさしあげようかしら、もしお返事いただけたらうれしいなあ、なんて考えたりしています。（渋谷区代々木富ヶ谷一四一三 松田昌子より）

昌子さん、お手紙ありがとう 茉莉子ね、お正月の映画とるためにあっちこっち、とつてもたいへんだったの、でも今日それもすんだし、やっと一息ついているところなもよ。茉莉子、お休みのときに何してるとお思いになる・・・ウフフフ・・・なあにもしないの。ただ、読みたいと思っても、ふだんは読めない本を読んだり、おかあさまと早く春にならないかしらなんてお話ししてるのよ。昌子さんとちっともかわらないでしょ？私のほうでは、あしたからまた新しいお仕事です。どうぞお体に気をつけてね。さようなら。（岡田茉莉子より）

司葉子おねえさまへ

葉子おねえさま、私はおねえさまのもうれつなファンよ。私のアルバムの中は、おねえさまのお写真で、いっぱいです。私は映画が大好きです。もちろん、おねえさまのご出演なさる映画は、どんな映画でも見のがしたことはないわ。この間ね。おねえさまといっしょに、遊んだ夢をみたわ。こんどはもっとたのしい、夢をみたいわ。では、いずれまた。さようなら。（神奈川県大磯町滝の沢 岡野喜代子）



若き日の司葉子（写真）

喜代子さんは今なん年生でしょうか？三学期でいろいろお勉強がたいへんでしょうね。しっかりがんばってね。あんまり映画ばかり見ては・・・イケマセンネってこれはじょうだん。お勉強のあいまには、またお便りちょうだいね。妹みたいに小さかった時のことなど思い出すのが好き。あの頃は・・・あの頃は・・・って、でもちょっとさいびしいわ。お元気でね。司葉子より

読者があこがれる女優を「お姉さま」と表現し、文通する。昭和戦前期までの少女雑誌によく見られた空想上の「擬似姉妹」の関係であったのであろうか。読者自らが「おねえさまのもうれつなファンよ」とか、「お勉強のあいまには、またお便りちょうだいね」という言葉には、読者をかわいがろうとするスタア・女優の姿が投影されているようである。「この間ね。おねえさまといっしょに、遊んだ夢をみたわ。こんどはもっとたのしい、夢をみたいわ」という言葉からも、遠距離であって手の届かない関係から、誌面を通じて、スタア・女優が一読者の「手の届く」存在に近づいているように感じるの。距離が近くなることで、読者に希望や夢を持たせる趣向をとっていた。

またテレビ放送との結びつきも強くなり、スタアに関する投書も見られるようになった。同誌の同号には「たのしいテレビ放送局」欄が登場し、池辺良、石浜郎、久我美子の「松竹歌劇団」公演の紹介やگران・プリ女優として京マチ子を紹介している。また「スターのお部屋」（同誌第6巻第6号、1956年5月15日）で「鰐淵晴子」の特集がくまれ、ますます誌面に登場する機会を多くしたし、投書欄の「仲良し横町」についても1丁目から3丁目にまで広がりを見せた。編集者側はスタアを大きく取り上げるような誌面の工夫を行っていた。また「スタア ポケット対談」（同誌第7巻第2号、1957年2月1日）のようなスタア同士の企画も見られるようになった。「野添ひとみ・上田みゆき 安田祥子・近藤圭子 中川姿子・川上康子・中川弘子・古賀さと子」などはその代表であった。

また投書欄の「仲良しルーム」のなかでも誌面の変化が見られるようになった。それは美容家山野愛子の「美容相談」欄が登場することになった。これにより少女読者らに対する「美人」化、「おしゃれ」化計画がスタートすることになった。美容相談には毎回数多くの美容への悩み、不安を訴える投書があとを絶たず、絶大な人気を誇る投書欄の1つとなっていった。仲良しルームにおいても「第一会場」、「第二会場」を新設し、とりわけ「第二会場」では、少女読者の「お悩み相談」欄としてその後機能するようになっていく。また投稿者を「仲良しルーム出席簿」という欄にまとめて名前が紹介されるようになった。すなわち読者の名前を公表し、さらなる読者獲得を図ろうとしたのである。かくして雑誌を「少女学園」のごときものに見立て、とけこみやすいようなシステムを構築した。

5. 誌面構成の工夫

5.1. 学習教養教材としての誌面作成

また、同誌は、スタア・アイドルの記事を多く掲載するかたわら、少女に対して教養を体得させようとする教材も登場した。例えば「詩」の欄では多くの投稿作品選者として西条八十がこれを担当し、数々の批評・コメントが寄せられた。スタアをおっかけ、スタアに恋焦がれ、自らの化粧、服装等を気にかける少女のみならず、教養についても習得した少女にという編集者の意向が感じられる。同誌では、少女の関心に止まるものばかりではなく、教養を習得させることも同時に行おうとした。

5.2. 表紙の「写真化」とアンケート調査の実施

1957(昭和32)年頃より『少女ブック』の表紙もそれまでの「絵」から「写真」に変わりはじめた。これまで誌面を賑わせた松島トモコを中心に、橋幸夫、寺尾真知子等が飾るようになった。まさしく当代スタアがにぎやかな表紙を飾った。読者らはその表紙をみて、ますます思いを募らせたのである。また投書欄も同誌第7巻第7号(1957年7月1日)【定価120円】(総ページ数228)によれば、「おじさん」が「仲良しルーム」に登場するようになり、誌面を盛り立てていく。また「うちのパパ・ママ」、「わたしのペット」、「マンガスタアのうた」も新設され、ますます誌面は少女読者の多関心・興味にあわせるものとなっていった。また「お便りちょうだい」欄には「五六年の方」、「中学一年の方」、「中学二年の方」、「中学三年の方」、「どなたでも」、「いつまでも」、「文通の好きな方」というようなカテゴリーに分けられた投書システムが採られた。中学生の世代の読者も同誌を愛読している可能性があったものと想像できる。さらに誌面構成についても一層検討されるようになる。以下に示したのは、同年に『少女ブック』読者に対して実施した「読者アンケート」についても実施されていた。

『少女ブック』の誌面構成は、編集部のお悩むところにもなっていて、愛読していた読者の意見に託すかたちとなった。テレビの影響を受けながらも、なんとか読者を奪われないために誌面づくりに必死になっていたことがうかがえるのである。

5.3. 誌面上における「マンガ」、「スタア」、「ファッション」記事の拡大—誌面構成の模索と苦勞—

誌面づくりの構成には、ますます工夫が求められた。以下に示したのは、廃刊の2ヶ月前ごろに出された1963年3月1日号の「目次」である。以下に見てみたい¹²⁾。なお網掛けは、執筆者が行った。

<目次>

(おもしろいまんが)

- ・日本一の少女まんが／ミミとナナ…………… (29)
- ・怪盗白バラ…………… (57)
- ・くじゃく石…………… (109)
- ・アルバイトさん…………… (175)
- ・歌のつばさに…………… (192)
- ・こわれた人形…………… (226)

(たのしい小説と読み物)

- ・白ゆりの丘…………… (49)
- ・カーネーション坊や…………… (149)
- ・青いヒヤシンス…………… (234)
- ・おかあさん…………… (92)
- ・浩宮さま日記…………… (88)
- ・とくべつよみもの／スターを夢みて…………… (77)
- ほんとうにあったお話／リツ子ちゃんに笑顔がもどった… (215)
- 身の上相談／あなただったらどうしますか？…………… (230)
- ◇仲良しルーム…………… (159)
- ◇懸賞募集と発表…………… (106)
- ◇たのしいくらしのページ…………… (134)

(美しいグラフと　スターのページ)

- ・プレゼントコーナー…………… (2)
- ・あなたのための3月のスタイル…………… (3)
- ・ミコちゃんのカワイイおうち…………… (7)
- ・バレエ名作劇場／白鳥の湖…………… (8)
- ・わたしはCMっ子…………… (13)
- ・テレビスタジオのプリンセス…………… (18)
- ・丸ちゃんのおひなまつり…………… (20)
- ・わたしのお国をみてちょうだい…………… (22)
- ・通学服をどうぞ…………… (24)
- ・新しいおねえさん…………… (26)
- ・学生スターのなやみは？…………… (90)

- ・スターフラッシュ…………… (41)
- ・スターの窓…………… (69)
- ・スター物語／歌っておどってレッツゴー！！…………… (154)
- ・お楽しみ映画館…………… (222)
- ・対談「パパとママどっちがすき」…………… (127)

「まんが」の誌面の多さは目を引く。時代が「まんが」を求めていたのであろうか。すでに少女雑誌のなかにも浸透している。またテレビを中心とした記事、スタア・アイドルを中心とした記事もこれまでどおり多く、読者からの支持を得ていた。またファッションをとりあつかった記事も見られ、読者の興味の分化がかがえるのである。皇室をとりあつかった「浩宮様」（現：皇太子殿下）の記事も斬新さをうかがわせる。しかしながら徐々に『少女ブック』の廃刊の足音は近づいていた。

6. おわりにー『少女ブック』の廃刊ーおしゃれで多趣味・多興味な少女たちの登場ー

同誌は、あらたな新興の雑誌と販売競争を強いられながら、次第に窮地に追い込まれていくことになった。それは時代のニーズに求めようとしたが、うまくそれに応えることができずにいた。「ひまわり会」なる友の会も結成され、読者にさらなる特典を付与し、読者へのサービスを展開してきたが、1963年9月に打ち切りを発表することになった。おそらく同誌の廃刊は決定されていたものと思われる。また同年2月号には「女性明星」（定価190円）の宣伝広告の掲載がなされるようになった。「私たちの「りぼん」や「少女ブック」の集英社からステキなお姉さま雑誌“女性明星”ができました。それはきれいで、よいセンスのページばかりよ。おねえさまもぜひよんでね」と少女ブック読者を刺激する内容であることもうかがえる。また人気を博していた「まんが」雑誌も次々と広告として登場した。

「週刊少年サンデー」（定価40円）の宣伝広告などはすさまじい勢いを見せた。またそんななか、「少女ブック」は「あなたのすてきなスター雑誌」として紹介され、さらなる路線変更を余儀なくされるのであった。なお同誌最終号【『少女ブック』最終号】には、以下のような内容が掲載された¹³⁾。

(巻末のことば)

少女ブック愛読者のみなさま、13年ものながいあいだ少女ブックをかわいがってくださって、ほんとにありがとうございました。みなさまといっしょに、よろこび、たのしんでまいりました少女ブックは、新しい少女週刊誌「マーガレット」として、うまれか

わることになりました。

みなさま、ようきでおしゃれな「マーガレット」を、少女ブックにまけず、いつまでもかわいがってくださいね！

—少女ブック編集部一同—

週刊少女マーガレットモデル募集

少女週刊誌を記念して、マーガレットにでる、写真モデルを募集します。次のきまりをよくよんでふるって応募してください。

- ① 小学三年生から中学二年生までの東京か、その近くにおすまいの方で、撮影のとき東京にこられる方は申し込みできます。(撮影時の費用は編集部が負担します)
 - ② さいきんうつした、できるだけ大きな写真(キャビネ版くらい)の裏に、あなたの住所。氏名。学年をかき、びんせんにも次のことをかいて、封筒に入れておくてください。
- 住所○氏名○学年○ご両親のお名前と職業
- ★ 応募なさるときは、かならずご両親と相談してください。
 - ★ 締め切りはもうけていません。えらばれた方には直接おしらせし、少女週刊誌マーガレットにのせます。(電話でのおといあわせはおことわりします)
 - ★ おくりさき、東京都千代田区神田局内集英社 少女週刊マーガレットモデル係

新雑誌『週刊少女マーガレット』に関する内容のものである。誌面の随所にその広告が見られるという編集者の力の入れ具合がうかがえる。昭和30年代の雑誌出版界は、週刊誌発刊の渦中にあり、まず総合誌が出され、女性誌がそれに続いた。やがて少年・少女向け雑誌の週刊化が始まる。番組が週単位で編成されるテレビの普及が急速に進み、生活そのものも週単位化しつつある時代の、不可避的な要請でもあったかもしれない。出版各社とも、この時代の流れに抗しきれず、相次いで月刊誌を終刊した。講談社は戦前からの伝統を誇っていた『少年クラブ』・『少女クラブ』も1962年12月に廃刊した。また1963年1月に『週刊少女フレンド』を創刊し、マンガ誌でおなじみの『週刊少年マガジン』とともに少年・少女誌の週刊化に先行した。

このことは集英社も、大手他社と同じく児童誌の再編成を迫られることになった。その第一弾が『少女ブック』にほかならなかった。やがて週刊『マーガレット』として再出発することになる。が、先行雑誌の模倣ではないオリジナリティの表出が不可欠であり、誌面構成には周到な工夫をこらさねばならない。カラー口絵、グラビア、二色ページ、活版ページに写真小説、ファッション、料理などの記事、さらには漫画を盛り込むといった“少女向け総合週刊誌”であった。

本研究では、おもに3点のことを明らかにすることができたと考える。①『少女ブック』誌は明治期から昭和戦前期に発刊された少女雑誌と異なる少女総合雑誌として発刊された。とはいえ、以前から定評のあった読者の投書欄には力を注いだ。「仲良しルーム」が終刊まで永続できたのは、読者のための誌面づくりに意識を傾けた証であった。読者投書欄では、読者が互いに「少ブ」という略語を合言葉にし、目には見えない読者の共同体を形成した。②しかし「少ブ共同体」は以後誌面の外で仲間同士の連帯を求める変化を遂げるようになった。読者の関心が今まで以上に、多方面に展開したことと関係しているだけでなく、戦後の個人主義の考えに連なるところがあるとうかがえる。さらには投書欄に投書を寄せる読者においても、仲間を求めること以上にスタア、アイドルに熱狂するような傾向が見えてきた。同誌編集者は誌面では手の届かないスタア・アイドルと文通を通じて交際し、より近い距離での関係を構築することに一役買ったのである。そのため本来の小説、物語を中心とした誌面構成が、さらなるテレビの普及などを理由に大きく様変わりすることになった。③時代の流れに追いつくことがいつしか目的となった同誌は、読者の関心のあることをリサーチし、誌面づくりに活かすようになっていった。時代を経るにつれ、さらなる誌面構成の工夫が求められ、構成の模索が続くことになった。いつしか『少女ブック』は「あなたのすてきなスター雑誌」としての方向性をとることになり、誌面方針の転換に苦悩した。ついには、マンガ雑誌の台頭をはじめとした新興雑誌の登場により、同誌はその役割を終えることになった。

【註】

- 1) 田中卓也「幼年ブックにおける読者の研究」日本保育学会第64回大会ポスター演題発表、於玉川大学、2011年5月24日。
- 2) 集英社社史編纂室編『集英社70年の歴史』株式会社集英社、1997年、44～45頁。
- 3) 同上。
- 4) 同上。
- 5) 同上。
- 6) 『少女ブック』第4巻第11号、集英社、1954年9月1日。当時の同誌の1冊あたりの価格については、全235頁で105円であった。
- 7) 同誌第4巻第12号、1954年10月1日。
- 8) 前掲、同誌第4巻第11号。
- 9) 同上。
- 10) 同誌第5巻第1号（新春号）、1955年1月1日、当時の同誌の1冊の価格については、全240頁で定価130円であった。若尾は1933年生まれの女優（第5期大映ニューフェイス）として、その後活躍することになった。
- 11) 同上。岡田茉莉子は1933年生まれのわが国を代表とする女優である。芸名は谷崎潤一郎が名付け親である。代表作には映画「悪女の季節」、「今年の恋」などがある。司葉子は、1934年生まれの東宝の看板女優であり、代表主演作映画には「紀ノ川」がある。
- 12) 同誌第13巻第4号、1963年3月1日。当時の1冊の価格については総頁数240で、122円であった。

- 13) 同誌最終号、1963年5月1日。最終号は総ページ数254で1冊当たり定価130円であった。

【少女ブックの表紙・内容】



【少女ブックの附録】

